田畑の草種（くさぐさ）

嫋草藤（ナヨクサフジ）

須藤　健一

マメ科ソラマメ属の蔓性の一年草あるいは越年草。ヨーロッパ原産の帰化種で，1943 年に天草での帰化が報告され，今では本州以南に広がっている。全体に毛の多いビロードクサフジとともにヘアリーベッチの名で飼料や緑肥，被覆植物として栽培され，市販もされている。それらが逸出・野生化し，道端，畦，河川敷，草地，荒れ地などに侵入している。

蔓性で，茎は柔らかく地際から分枝し地面を這う。他のものにまとわりついて広がり，蔓の長さは 2m にもなる。葉は互生し偶数羽状複葉，小葉は 10 対前後の狭楕円形で 1 ～ 3cm，先端は尖る。頂片は 3 つ～ 5 つに分かれた巻きひげとなり周囲のものに絡みつき体を支える。5 月～ 8 月に茎の葉腋から長さ 5 ～ 20cm ほどの総状花序を出し，花の長さ 1 ～ 1.5cm，萼筒の長さ 5 ～ 6 m m の紅紫色の蝶形花を 10 ～ 40 個，花序の片側に整然とつける。

繁殖力は旺盛で，河川の法面などでは一面に群生し辺りを紫色に染めているのを見かける。一方，三つ四つの小さな株でも花が咲いている時にはよく目立つ。その花は，垂れ下がっている藤の花を上向きにしたような，小さいながらも藤の花に似て美しい花である。

熟したときの豆果は長さ 2 ～ 4cm，幅 1cm ほどで，2 ～ 7 個の種子が入る。

ナヨクサフジの「ナヨ」には「弱」や「嫋」の字が充てられる。前者は文字通り「よわい」「強くないこと」を表すが後者は「しなやか」「たおやか」といった意味を持つ。ナヨクサフジの名前も，茎がクサフジより細くて弱々しくみえるということからこの名が付いたとされる。実際に辞書で「なよ」を調べてみると「なよなよ」や「なよびか」「なよやか」「なよ竹」などがでてくる。いずれも「しなやかなさま。たおやかなさま。」を表している。

ところで「竹取物語」というお話をご存じだろうか。よく知られている通りこの物語は「かな」で書かれた現存する日本最古の物語とされ，竹取の翁夫妻が光り輝くしなやかな竹の節の間から生まれた小さな女の子を育て，その子が大きく美しくなると 5 人の貴公子や帝の求婚を振って月に帰っていくという物語である。

その「竹取物語」の冒頭はこのような内容である。

しなやかな竹の節の間から生まれたその女の子はすくすくと瑞々しく美しく成長し，三月もすれば妙齢の娘へと成長した。翁夫妻は竹の中から見つかる黄金のおかげで有力者となり，娘を帳の内から外へ出さず，大事に育てていた。この娘の見目麗しきこと，世にまたとなく，家の中は暗いところがなく光に満ちていた。そのうちに娘が大きくなり，名を付けてもらったところ「なよ竹のかぐや姫」と名付けられた。その命名の日から三日間，男を分け隔てなく招き集めて，盛大に管絃を奏して祝ったという。

かぐや姫の物語の詳細は他に譲るとして，「なよ竹の」という言葉は古典で枕詞としても使われ，そのイメージは「しなやかで優雅な女性」をも象徴する。

ナヨクサフジも，藤に似た紫色の花を咲かせる非常に美しい植物である。ナヨクサフジもなよ竹のかぐや姫もどちらも「柔らかく美しいもの」ではなかろうか。ナヨクサフジは細くて弱々しいのではなく，かぐや姫のようにしなやかで柔らかい竹のように，決して折れたりしないクサフジ，つまり「ナヨタケノクサフジ」であったかもしれない。それがさすがに「タケ」ではないだろうということで「ナヨクサフジ」になった，というのは穿ち過ぎだろうか。